

アルゼンチンの牛肉生産事情



平成27年3月18日
独立行政法人農畜産業振興機構
調査情報部 山崎 良人

本日の内容

○目的

アルゼンチン、ブラジルからは、日本への牛肉輸出は行われていないが、国際需給に影響を与える両国の牛肉を巡る生産及び需給動向を考察する。

○内容

- 1 アルゼンチンとブラジルの
農業概況、肉牛・飼料原料生産概況
- 2 アルゼンチンの生産動向
～放牧肥育から穀物肥育へ～
- 3 アルゼンチンの牛肉輸出動向
- 4 アルゼンチン牛肉生産の今後の見通し

1 アルゼンチンとブラジルの農業概況、肉牛・飼料原料生産概況



ブラジルの放牧風景



アルゼンチンの放牧風景

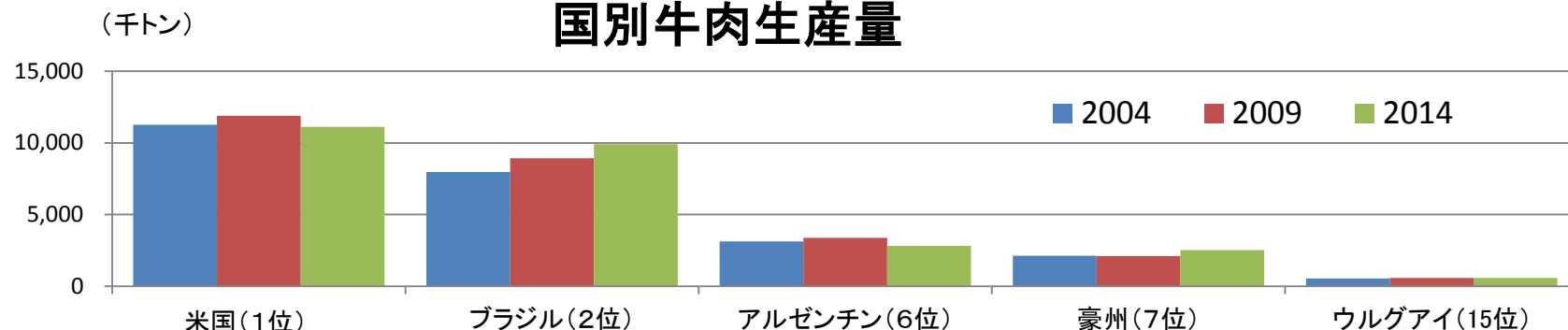
アルゼンチンとブラジルの農業概況

		アルゼンチン	ブラジル	日本
人 口(千人) 世銀(2013)		41,446	200,362	127,839
農林漁家人口(千人) FAO(2012) (人口に占める割合)		3,045 (7.3%)	19,864 (9.9%)	2,377 (1.9%)
国土面積 (千ha)		278,040 (日本の約7.4倍)	851,577 (日本の約22.5倍)	37,796
農用地面積 (千ha) FAO(2012)		148,791 (日本の約32.7倍)	275,605 (日本の約60.6倍)	4,549
牛肉 (千トン、枝肉重量 ベース、USDA2013 年)	生産量	2,850 (世界第6位)	9,675 (世界第2位)	508
	輸出量	186 (世界第11位)	1,849 (世界第1位)	1
トウモロコシ生産量 (千トン、USDA2013/14年)		26,000 (世界第6位)	79,500 (世界第3位)	1
大豆生産量 (千トン、USDA2013/14年)		54,000 (世界第3位)	86,700 (世界第2位)	198
一人当たり食肉消費量 (うち牛肉) (kg/年)FAO(2011)		101.7 (54.9)	93.0 (39.1)	48.8 (9.0)

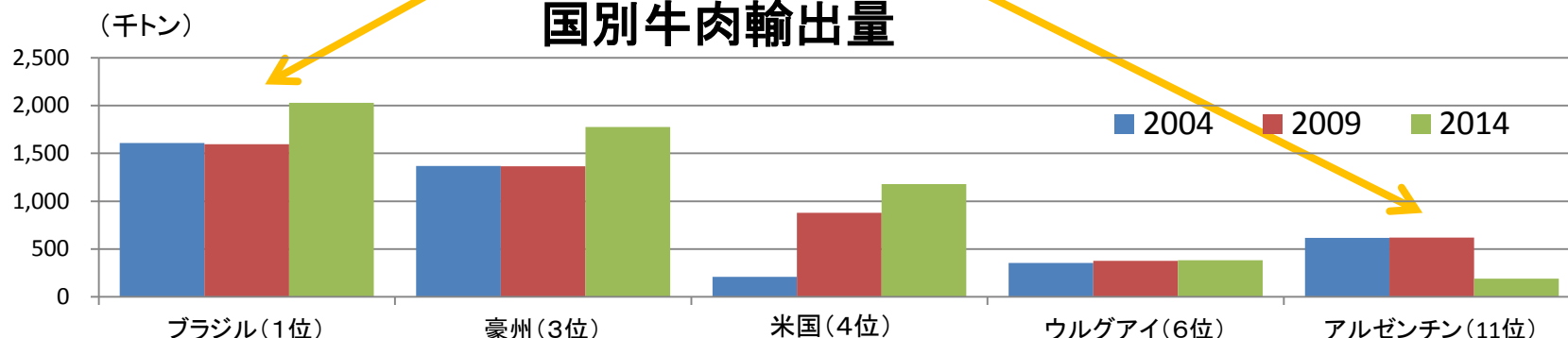
アルゼンチンとブラジルの牛肉需給

- 牛肉生産量: 世界全体が横ばいで推移する中、ブラジルは増、アルゼンチンは横ばいで推移
 - 牛肉輸出量: 世界全体で増加傾向にある中、ブラジルは増、アルゼンチンは減少で推移
- ↓
- ブラジルは外需志向、アルゼンチンは内需志向

国別牛肉生産量



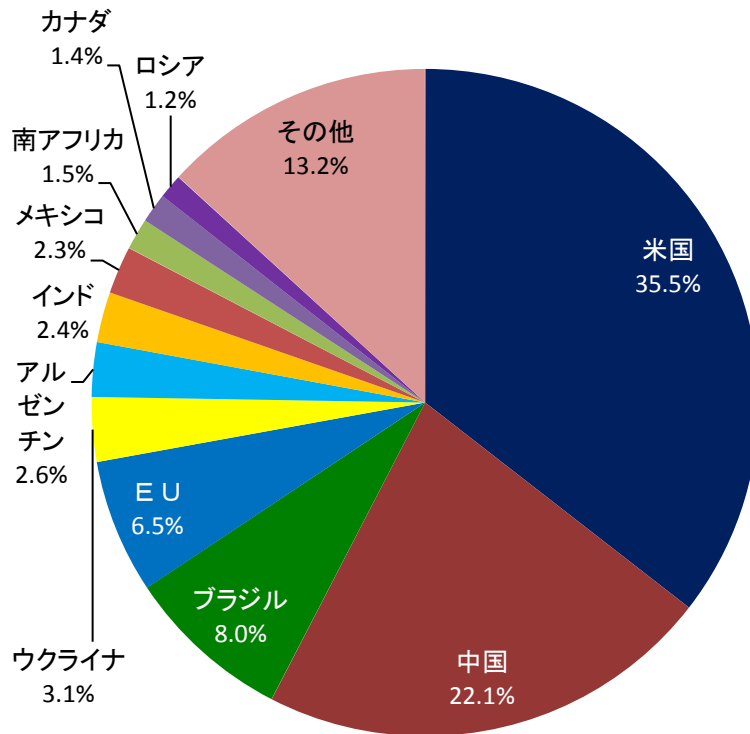
国別牛肉輸出量



両国の飼料原料生産、輸出

① トウモロコシ

生産量(2013/14年度)

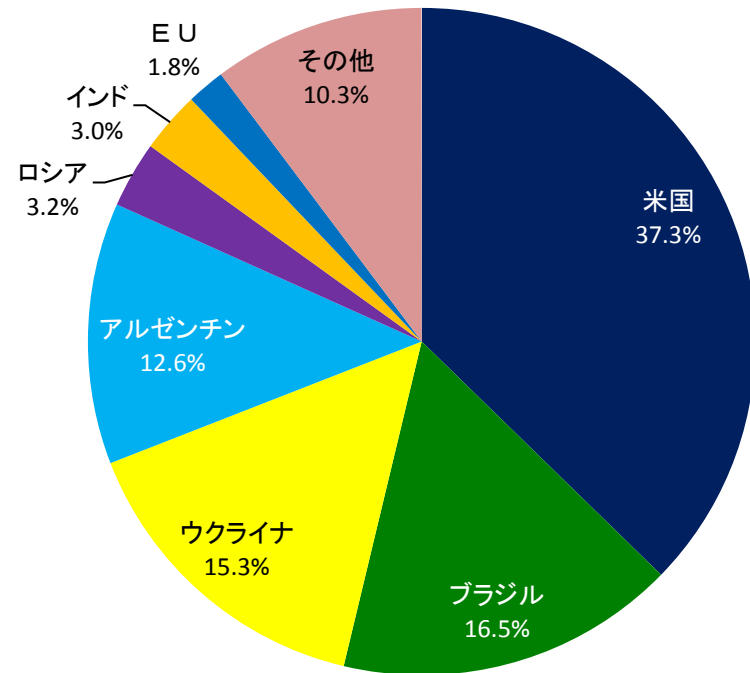


総計: 989,038千トン

資料: USDA

注: 年度は、3月～翌2月

輸出量(2013/14年度)



総計: 130,576千トン

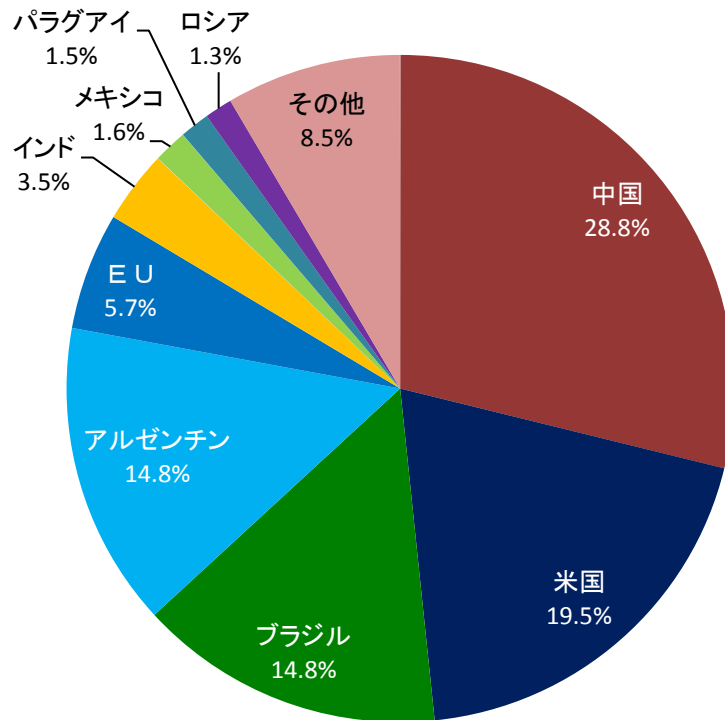
資料: USDA

注: 年度は、3月～翌2月

両国の飼料原料生産、輸出

②大豆かす

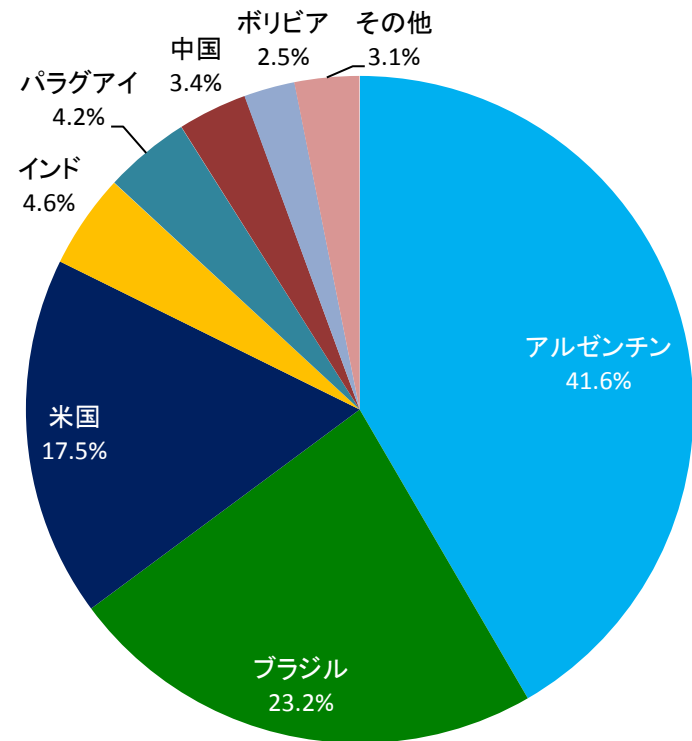
生産量(2013/14年度)



総計: 189,094千トン

資料: USDA

輸出量(2013/14年度)



総計: 60,020千トン

資料: USDA

両国の将来性

- ① 飼料となる原料生産の増加（安価での確保が可能）
- ② 穀物肥育による牛肉生産の増加（放牧からの移行）



牛肉生産拡大の余地、国際市場での存在感は
より高まる可能性あり

2 アルゼンチンの牛肉生産動向

～放牧肥育から穀物肥育へ～



放牧肥育



穀物肥育

肉牛生産の変化

従 来

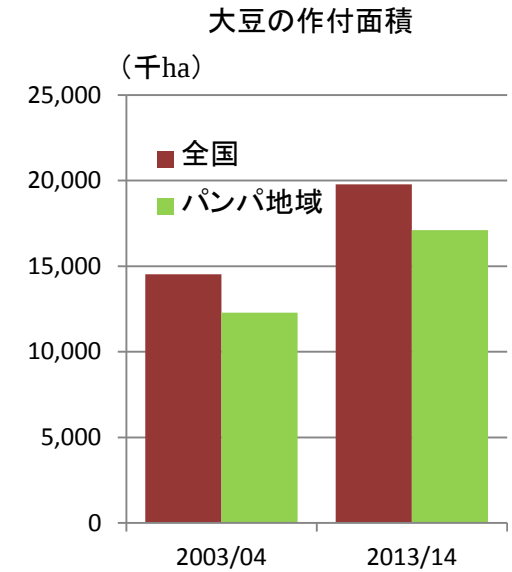
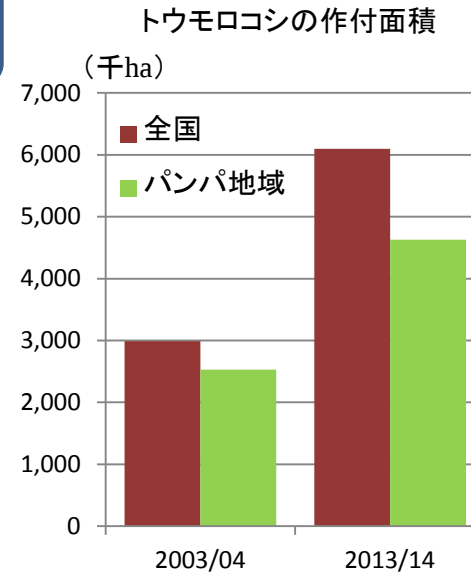
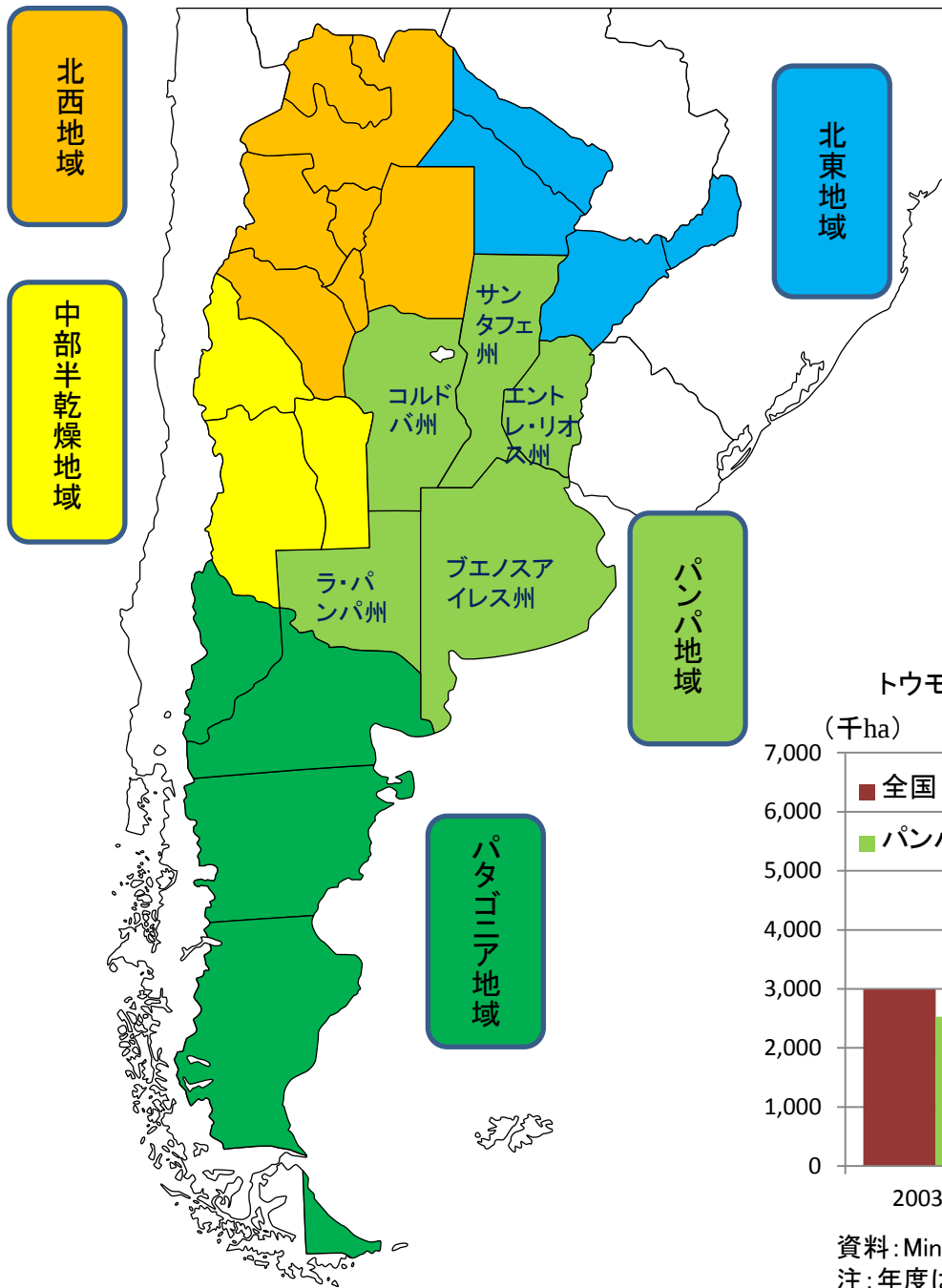
- **放牧**生産は、牧草資源豊かなパンパ地域が主体
- 中国などからの**大豆需要が拡大**
 - 国際価格の上昇
 - 大豆生産の収益性の向上（放牧から穀物へ）

現 在

- パンパ地域の大**豆**生産拡大により、肉牛生産は放牧から飼料利用に
 - 牧草用地の縮小とともに、豊かな飼料資源を活用した**放牧からフィードロットへと生産が拡大**

農業の中心パンパ地域

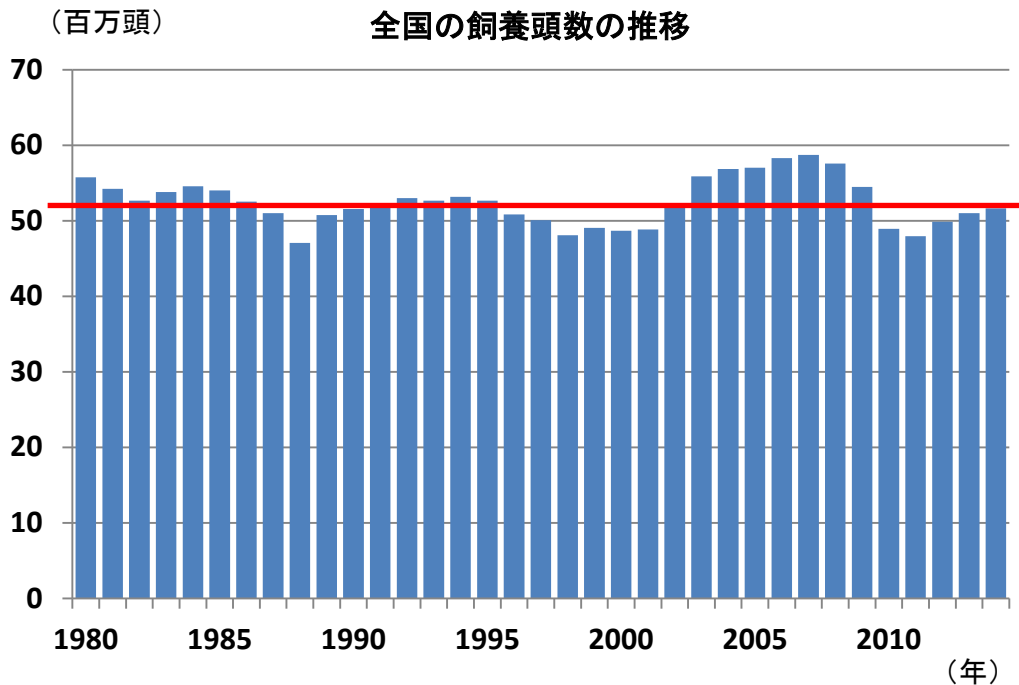
- ・アルゼンチン農業は、ラプラタ川流域の肥沃な**パンパ地域**が中心
- ・パンパは世界の3大肥沃土の一つ（他はウクライナのチェルノーゼム、米国のプレーリー）
- ・パンパ地域をカバーする州の面積：8281万ha（日本の2.2倍）
- ・パンパ地域のトウモロコシ、大豆の**作付面積が拡大**



資料: MinAgri
注: 年度は、3月～翌2月

肉牛の飼養頭数の推移

- 国全体では、1980年以降、おおむね5千万頭前後で推移
- パンパ地域では、肉牛の放牧に比べ収益性の高い大豆などの作付が進み、作付面積は増加、放牧地は減少。これにより、**パンパ以外の地域**での穀物肥育が増加し、この地域での**飼養頭数が増加**
- 肉牛生産は、堅調な牛肉需要などを背景に安定した生産が求められるため、放牧から穀物肥育への移行が進む



資料: MinAgri

パンパ地域と北東地域の飼養頭数の推移

(単位: 千頭)

	2002年	2014年	増減率
パンパ地域	41,193	35,681	▲15.4%
パンパ地域以外	9,807	15,965	62.8%

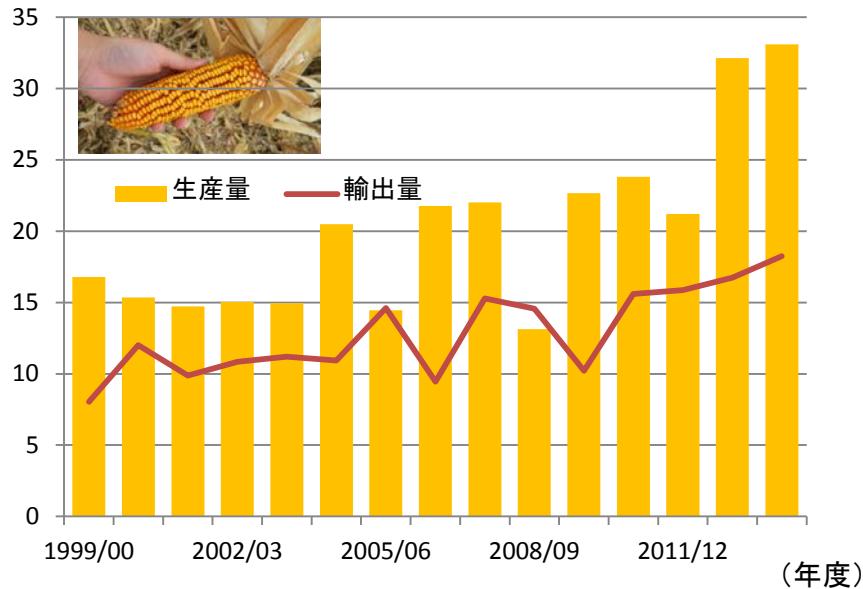
資料: MinAgri

飼料原料生産(トウモロコシ)

- ・トウモロコシは、国内需要分を確保するため、輸出許可数量を設定
- ・トウモロコシは、国際的に価格競争力を有し、作付面積が増加傾向で推移する中で、2012/13年度は、北米が干ばつにより生産が減少した一方、アルゼンチンは良好な気候条件により単収が増加

トウモロコシの生産量と輸出量の推移

(百万トン)



トウモロコシの生産者価格

(単位: 米ドル/トン)

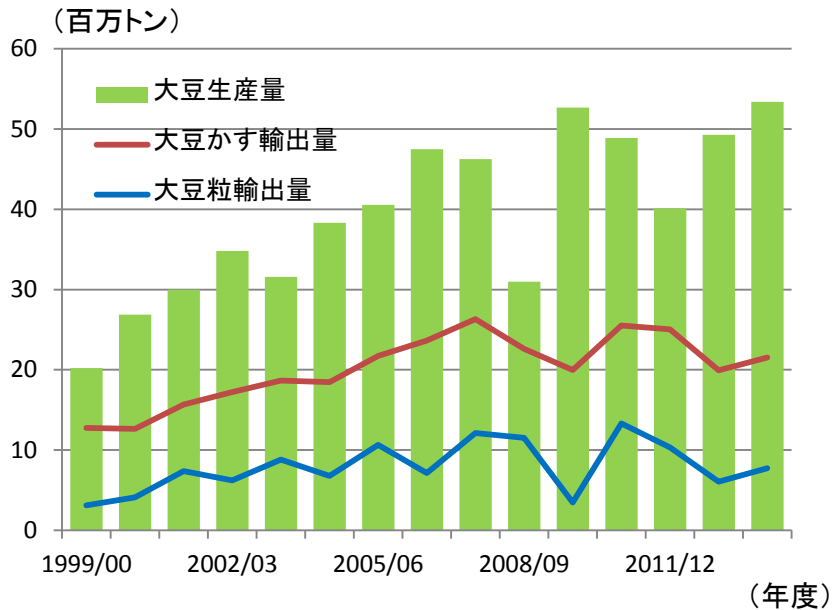
	2002年	2012年
アルゼンチン	78.3	203.4
ブラジル	89.3	226.9
米 国	91.0	283.0

資料: FAO

飼料原料生産(大豆)

- 大豆は、国内需要分が十分に確保されているので、トウモロコシと異なり輸出許可数量が非設定
- 大豆は、国際的に価格競争力を有することから、パンパ地域を中心に作付面積が増加
- 大豆かすは、大豆粒よりも輸出税率がより低いため、大豆かすの輸出は世界最大(大豆油の輸出も拡大)

大豆の生産量及び
大豆粒・大豆かすの輸出量の推移



資料: MinAgri

注: 年度は、精査さん量は3月～翌2月、輸出量は4～翌3月

大豆の生産者価格

(単位: 米ドル/トン)

	2002年	2012年
アルゼンチン	153.1	363.7
ブラジル	171.8	508.6
米 国	203.0	525.0

資料: FAO

輸出規制に関連する制度

- 農畜産物の国内供給を優先させるため、輸出登録制度、輸出課徴金制度による輸出規制を実施

輸出登録制度

1976年に公布された穀物・油糧種子に係る輸出登録に関する決議(543/2008号)に基づき輸出数量制限などを導入。その後決議7552/2009号により、仕組みを変更し、国内の市場動向に応じた輸出許可数量制を導入。

	トウモロコシ	大豆	小麦
輸出許可数量 (2013/14年度)	1600万トン	なし	200万トン

輸出課徴金(輸出税)制度

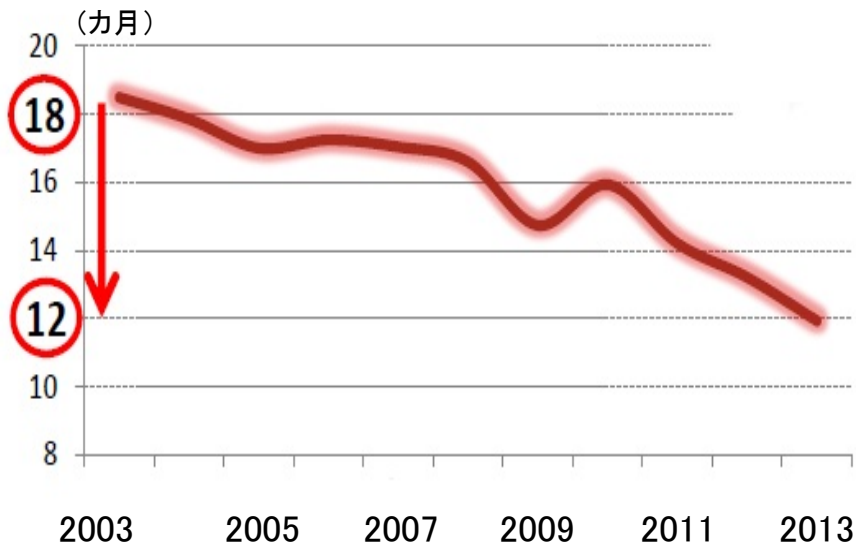
1994年に油糧種子に対して税率を課す輸出課徴金制度を創設。決議(11/2002号)により、対象品目を拡大。

	トウモロコシ	大豆	牛肉
税率	20%	35%	15%

消費者の牛肉に対する嗜好

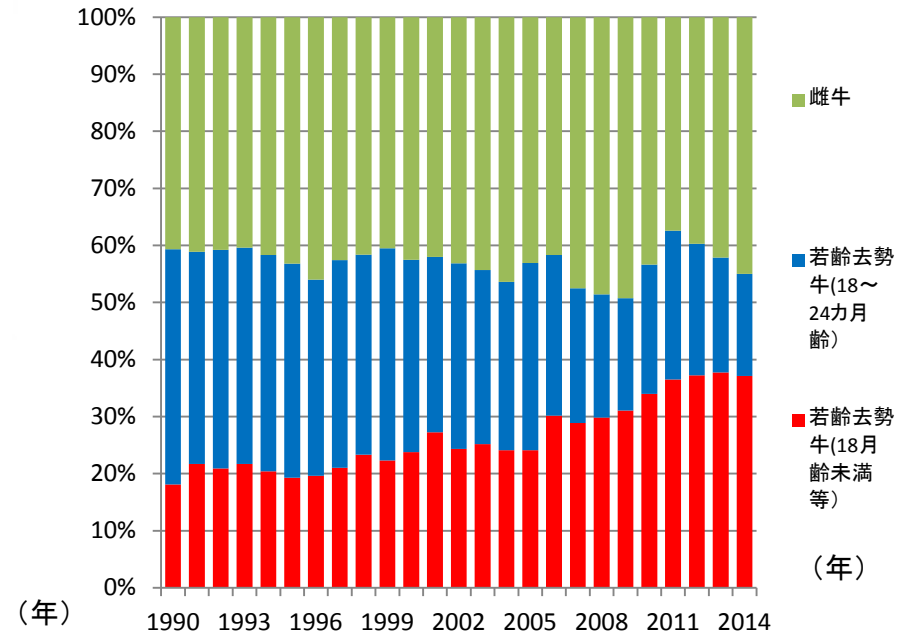
- アルゼンチン国民は、「若い牛ほど軟らかい」と認識
- アルゼンチン地域農業生産者連盟(AACREA)によると、雄牛の**平均肥育期間**は、18カ月(2003年)から、12カ月(2013年)に**短縮**。
- 1990年には、約4割を超えていた**若齢去勢牛(18～24カ月齢)**の**と畜割合**が18%まで**減少**。より肥育期間が短縮された牛肉の供給が増加

平均肥育期間(雄牛)の推移



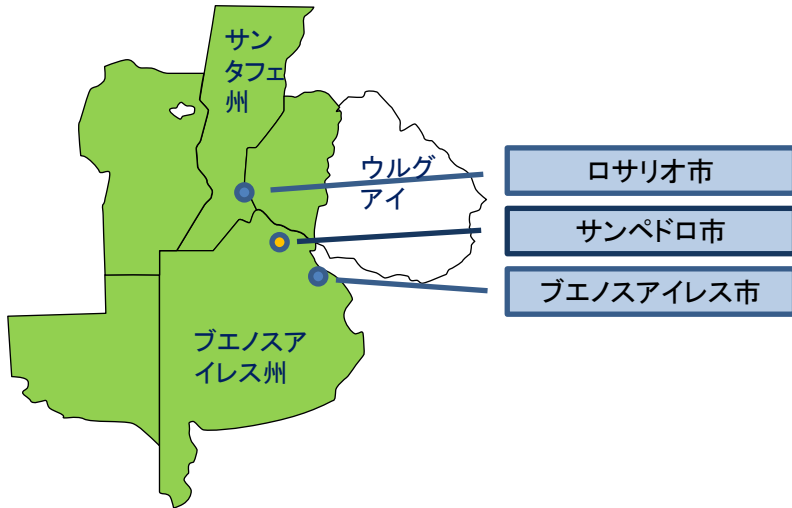
資料: AACREA

と畜頭数割合の推移



資料: MinAgri

肉牛生産事例～フィードロット～（サンペドロ市）



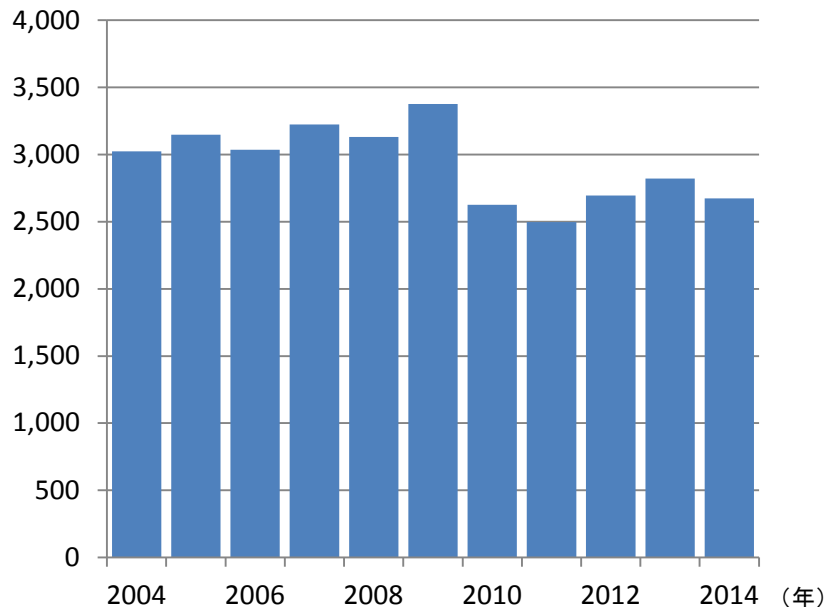
袋サイロにより、トウモロコシを保管

区分	内容
飼料	トウモロコシ(50%を自家栽培)、醸造かすなどが中心
品種	冬～春肥育:ヘレフォード種、アンガス種 夏～秋肥育:ブラーマン種
もと牛	150～200キログラム(5～8カ月齢)
肥育期間(1日当たり増体量)	約100～110日(1.25キログラム)
出荷体重	約300キログラム

牛肉生産量の推移

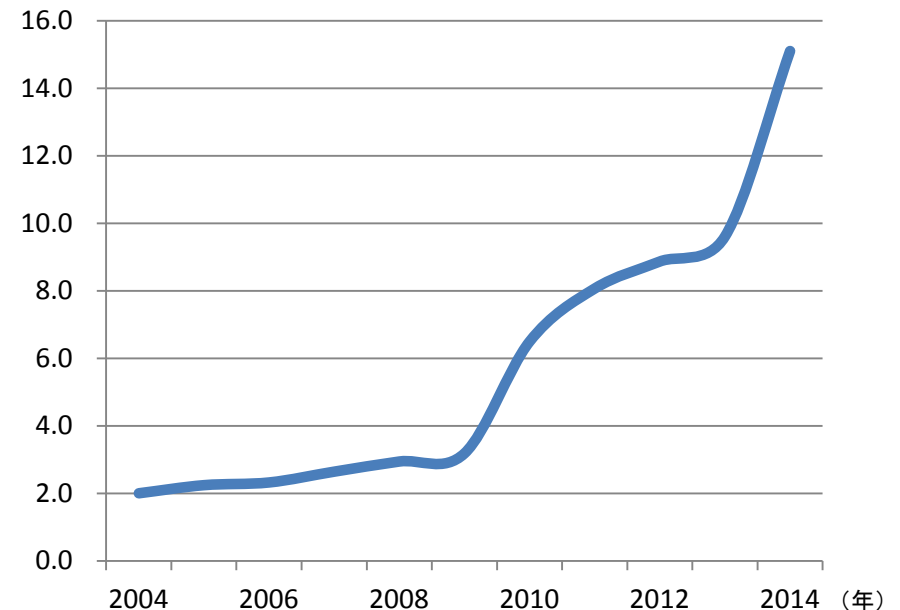
- 2008、2009年の全国での**干ばつ**により、繁殖雌牛のと畜が進み、生産量が増加
- 2010、2011年は、気候の回復により放牧環境が改善したことから、繁殖雌牛の保留が進み、生産量は減少
- 2012年から、需給の引き締まりにより去勢牛生体価格が上昇（過去10年間の公定インフレ率10%程度）

(千トン) 牛肉生産量の推移



資料: MinAgri

(ペソ/kg) 去勢牛生体価格の推移



資料: MinAgri

今後の生産見通し

現 状

- 飼料穀物の豊作により、国際的な飼料価格安の影響はあるものの、インフレにより生産コストは上昇
- 2014年初めに繁殖地帯を襲った洪水により被災し、繁殖雌牛や育成牛が減少

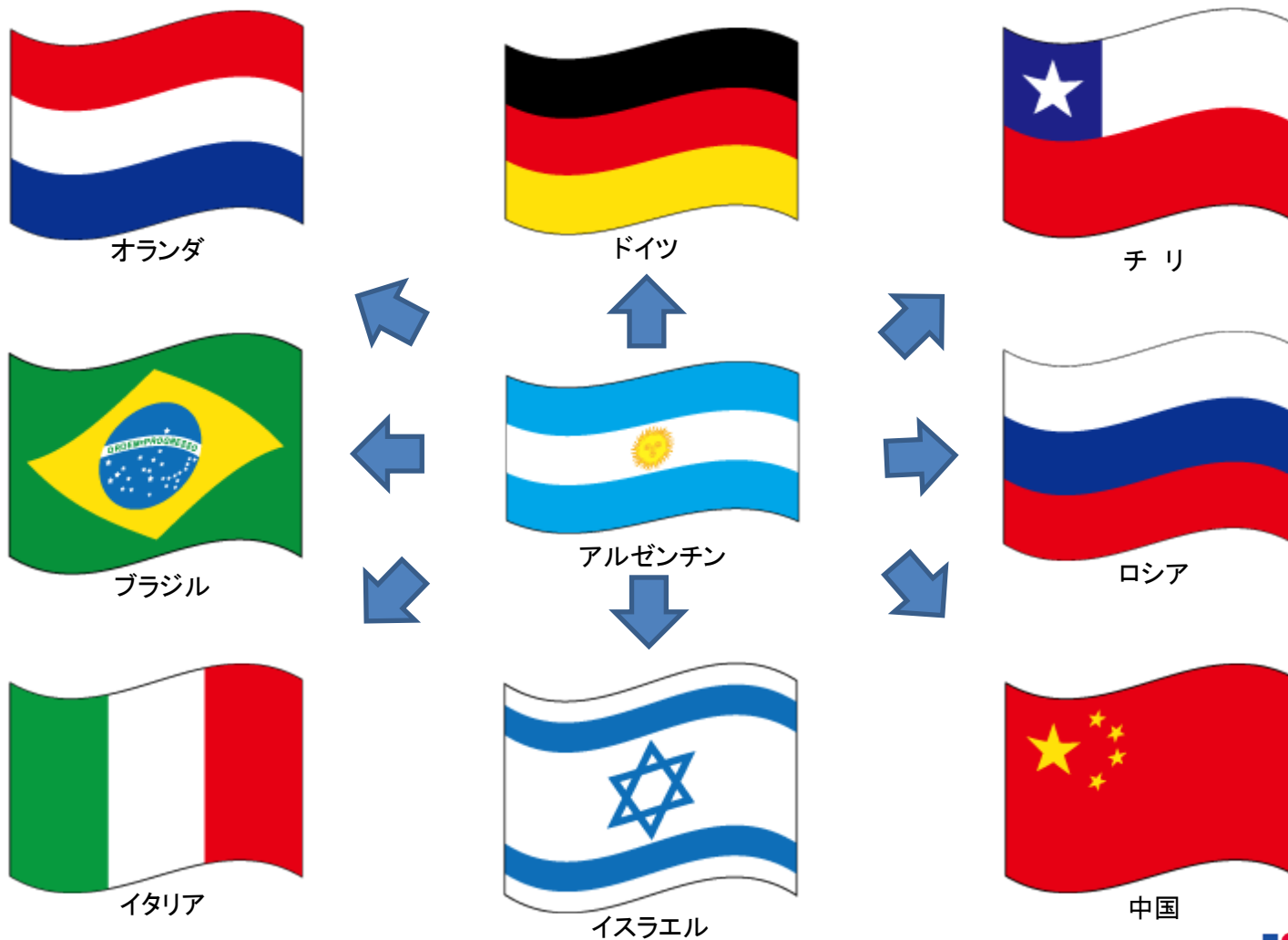
課 題

- 政府による輸出規制(輸出税)により、輸出向け生産意欲は減退

見通し

- 繁殖雌牛は、天候に問題がなければ、2年後から頭数増が見込まれる
- 輸出規制により、国内向けを中心とした穀物肥育生産は継続の見込み

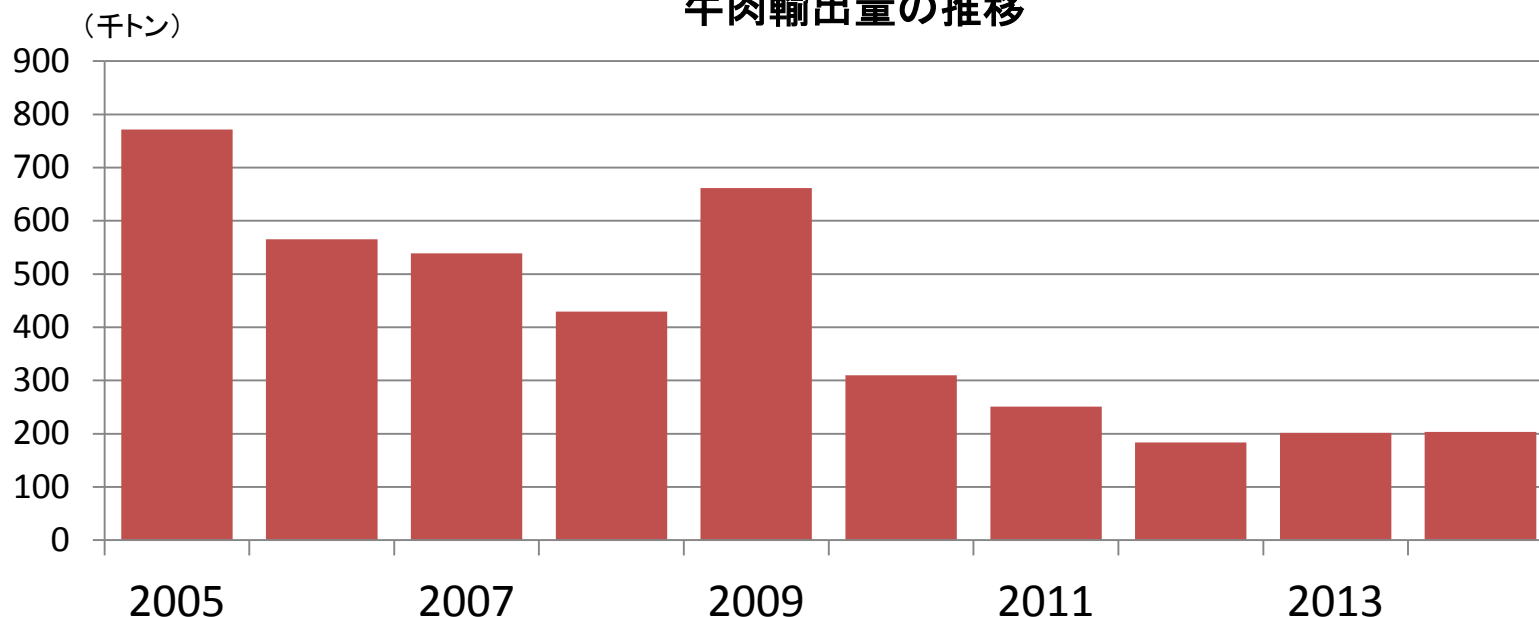
3 アルゼンチンの牛肉輸出動向



牛肉輸出量①

- アルゼンチンからの牛肉輸出は、2005年をピークに減少。
- 2006年は、国内の需給調整のため、牛肉**輸出停止措置**を実施したことにより減少。
- 2007年は、輸出停止措置の継続(5月末まで)、2008年は、**国際金融危機**の影響により、減少が続く。
- 2009年は、干ばつによると畜頭数の増加に加え、国際金融危機の影響により一時冷え込んだ海外市場が2009年後半にかけて回復したことから、輸出量が増加
- 2010年は、干ばつによる飼養頭数の減少などにより生産が減少し、輸出量が減少
- その後も、国内需要優先のための**輸出税**(15%)を課すなどの政策より、輸出意欲は低下。
2014年は、ピークであった2005年の4分の1

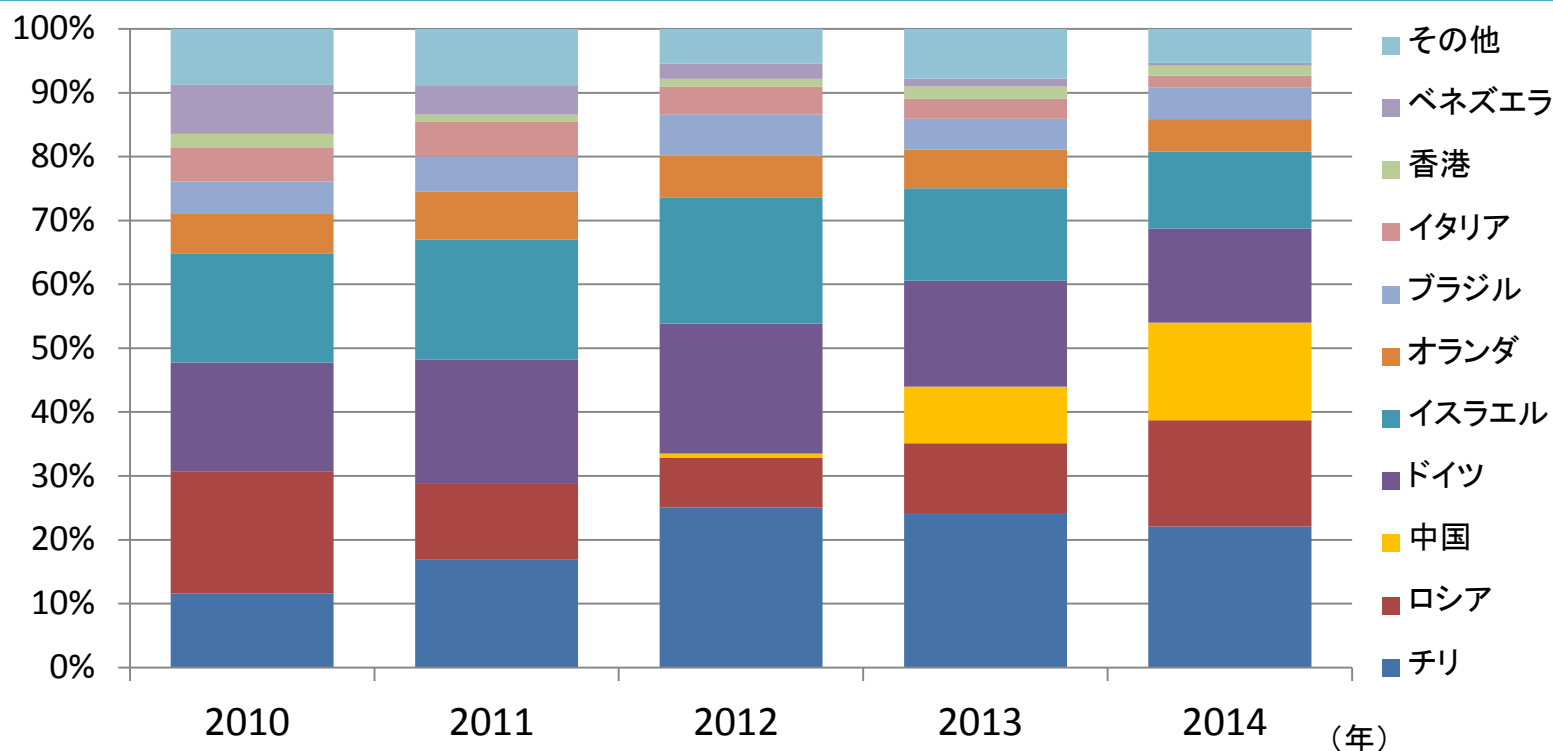
牛肉輸出量の推移



資料: MinAgri
注: 枝肉重量ベース

牛肉輸出量②

- ・輸出量を国別に見ると、隣国のチリ、ブラジルやロシア、イスラエルのほか、ヒルトン枠を有するEU諸国向けが多い。
- ・ロシア向けの割合は従来から多かったが、近年は他の南米諸国にシェアを奪われ減少傾向で推移。2014年は、同国の禁輸措置により、アルゼンチンからの輸出が前年比66%増加
- ・アルゼンチンは、中国が輸入を認可している数少ない国の一つで、中国の強い需要により、近年同国向け輸出が増加



資料:「Global Trade Atlas」

注1:製品重量ベース

2:HSコード 0201、0202で集計

EU向け牛肉輸出枠 ①

- EU向けにヒルトン枠と高級牛肉無税枠の2種類の特別枠を所有
- 高級牛肉無税枠は、2014年9月に承認

枠	対象国	量(トン)	税率	規程
ヒルトン枠	アルゼンチン	30,000	従価税20% (従量税なし)	EU規則 593/2013
	ブラジル	10,000		
	ウルグアイ	6,300		
	パラグアイ	1,000		
	米国/カナダ	11,500		
	豪州	7,150		
	NZ	1,300		
	計	66,750		
高級牛肉 無税枠	すべての国 （平成27年2月28日 現在の承認国）	48,200	無税	EU規則 481/2012
	アルゼンチン	各四半期 12,050		
	米国			
	カナダ			
	豪州			
	NZ			
	ウルグアイ			

EU向け牛肉輸出枠 ②

ヒルトン枠

放牧肥育

牛肉格付け(※)の歩留まりが、去勢牛でU2以上、未經産牛でB以上

トレーサビリティが確保されていること

その他

- ・22～24カ月齢の肥育牛であること
- ・アンガス種やヘレフォード種などの高品質な肉用種であること
- ・ヒレ、ロース、モモの部位であること

EUの 輸入実績 (アルゼンチン分)

年度	実績 (トン)	消化率
2012/13	24,336	81.1%
2013/14	23,664	78.9%
2014/15	14,043	80.2%

資料: 欧州委員会

注1: 年度は、7月～翌6月

2: 2014/15年度は、1月末現在

高級牛肉無税枠

穀物飼料を100日以上給与

政府が雇用した者により格付けされた牛肉であること

30カ月齢未満の牛由来であること

EUの 輸入実績

(アルゼンチン(2014年9月承認)を除く全承認国分)

年度	実績 (トン)	消化率
2012/13	32,324	70.3%
2013/14	41,338	85.8%
2014/15	23,588	97.9%

資料: 欧州委員会

注1: 年度は、7月～翌6月

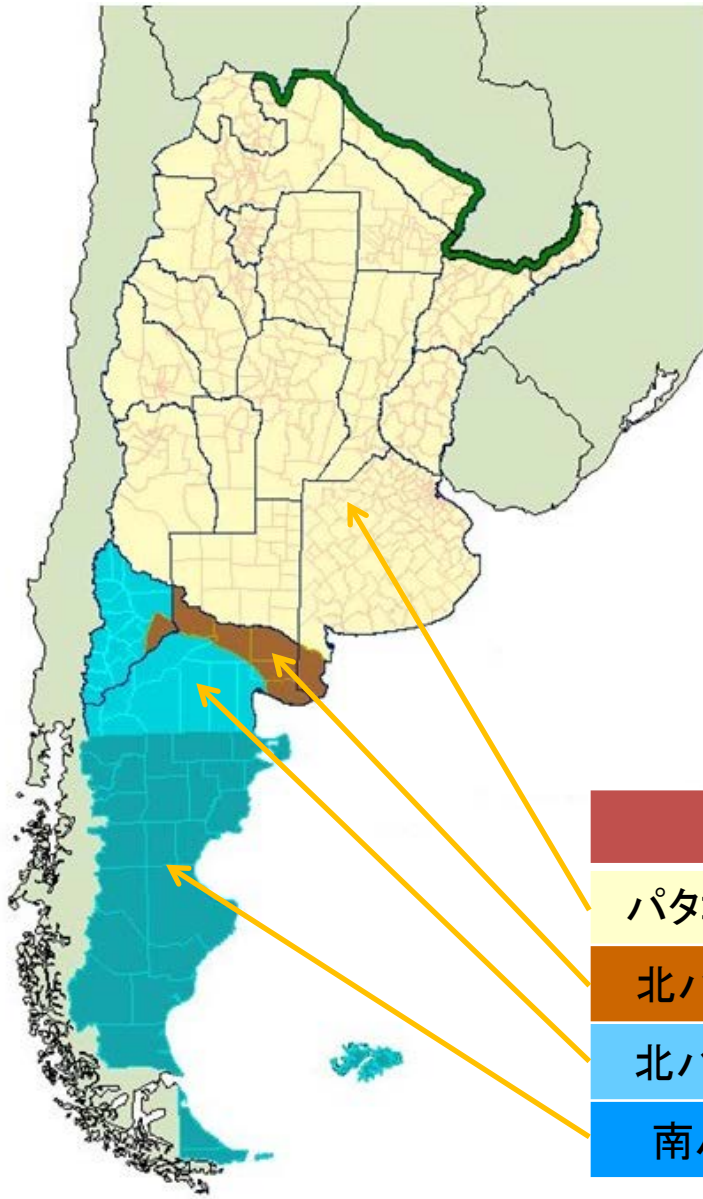
2: 2014/15年度は、12月末までの2四半期分

(参考: アルゼンチンの格付)

	歩留まり (高品質←低品質)						
去勢牛	JJ	J	U	U2	N	T	A
未經産牛	AA	A	B	C	D	E	F

口蹄疫ステータス

- 国際獣疫事務局 (OIE) から、ワクチン接種清浄地域とワクチン非接種清浄地域としてステータスを取得
- 米国農務省動植物衛生検査局 (USDA/APHIS) は2014年8月、OIEステータス取得を受け、パタゴニア地域を口蹄疫等の清浄地域のリストに追加する提案
→承認後、同地域からの牛肉輸出が可能へ
- しかし、パタゴニア地域の牛の飼養頭数は、同国全体の5%、かつ、同地域の自給向けで、輸出余力はなし



地域	ステータス
パタゴニア地域以外 北パタゴニアA地域	口蹄疫ワクチン接種清浄地域
北パタゴニアB地域 南パタゴニア地域	口蹄疫ワクチン非接種清浄地域

現況を踏まえた今後の輸出見通し

現 状

- 中国向けは、同国の旺盛な需要により**増加**
- ロシア向けは、同国によるEU産などの禁輸措置により**増加**
- EU向けは、枠を有するも、毎年枠を**消化できず(他国との競合)**

課 題

- 政府による輸出規制(輸出税)により、輸出向け生産意欲は減退

見通し

- 中国向けは、引き続き**好調**の見込み
- ロシア向けは、同国の原油価格下落による購買力の低下により、**減少**を見込むも、禁輸措置の動向によっては先行きは不透明
- EU向けは、新たな枠を獲得するも、同枠を巡る他国との競争及び輸出規制により、**大幅な増加は見込めない**。
- このため、当面の牛肉輸出は**中国やロシア次第**

アルゼンチンの牛肉の今後

- 飼料原料生産の増加により穀物肥育の増産は期待されるも、2014年は肉牛価格の上昇や繁殖雌牛の減少により肉牛飼養頭数は減少見込み。牛群再構築による、牛肉生産の増加は、数年後との見込み。
- 穀物肥育の増加により、EU向け高級牛肉無税枠を獲得。同枠を巡る他国との価格競争はあるが、EU向け輸出量は増加の可能性。しかし、今後のEUの高級牛肉無税枠の運用と輸出規制の対応を見極める必要あり。
- 穀物肥育の増加により、良質な牛肉生産の潜在能力は有している。肉牛生産は、政策や経済が生産を阻害する要因で、業界関係者の不満は大きいが、これに政府がどのように対応するかによっては、牛肉輸出の拡大の可能性あり。

ご清聴ありがとうございました。



※本情報は、情報提供を目的とするものであり、取引・投資判断の基礎とすることを目的としていません。本資料の正確性の確認等は、各個人の責任と判断をお願いします。提供した情報の利用に関連して、万が一、不利益が被る事態等が生じたとしても、ALICは一切の責任を負いません。